

二〇二五年度

## 第一回入学試験問題

【国語】 時間 45分

### 【校長からのメッセージ】

おはようございます。

肩の力を抜き、深呼吸をしましよう。

左の【注意】をていねいに読んでください。

あなたが鷗友生として、この教室で過ごす日を想像してみてください。  
丈夫。あなたの力が十分に發揮できることをお祈りしています。

### 【注意】

1 試験開始の合図があるまで、中を見てはいけません。

2 問題用紙は、全部で13ページあります。試験中によこれや不足しているページに気づいた場合は、手をあげて監督の先生を呼んでください。

3 解答用紙は問題用紙にはさまれています。  
問い合わせに字数指定がある場合には、最初のマス目から書き始めてください。なお、句読点なども一字分に數えます。

受験番号	氏名

一 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

二つ下の弟、幸次郎と裏庭の壁まで空の樽を二つ引き擦つてくる。大きい方を逆さに置いて上ると、広い仕事場の風窓が覗ける。七歳の幸次郎は、その樽の上にもうひとつ的小振りの樽を重ね、背伸びをしてようやく目が窓に届いた。小豆を炊く匂い、蒸した柏葉の青臭い湯気、火を入れた砂糖の香ばしさ。陽気な怒鳴り声、きびきびと働く『百瀬屋』の職人達。そして、広い作業場の一一番奥で菓子と向き合う父の、静かな姿。

幼い二人には、心の浮き立つ景色だ。

窓から流れてくる蒸し暑い風に、一際甘い匂いが混じる。幸次郎が鼻を鳴らし、うんっ、とつま先を伸ばした。片足が浮いた拍子に、ぐらりと小さな樽が揺れる。

「わっ、ばか」

転げ落ちかけた弟の腕を、慌てて支えた。

覗いていたのが母に知れたら、叱られる。

そろりと、風窓から仕事場の様子を窺う。

普段は優しい母だが、父や職人達の邪魔<sup>じやま</sup>をした時だけは、父よりも厳しく兄弟に接した。  
餌<sup>あん</sup>を仕込んでいた職人、茂市<sup>もいち</sup>とともに眼<sup>まなこ</sup>が合つた。茂市は顰<sup>しか</sup>め面<sup>おもて</sup>を作り、目<sup>まなこ</sup>で勝手へ兄弟を促<sup>うなが</sup>した。尻込みする幸次郎の手を引いて、勝手へ向かう。職人や奉公人、大所帶の飯を一手に賄う勝手は、夕飯にはまだ間があるせいで、がらんとしていた。先に来ていた茂市は顰め面のままだ。幸次郎は生真面目な職人の恐い顔に、半べそをかいている。

ごくりと唾<sup>つば</sup>を呑み込んだ時、茂市への字の口が綻んだ。背中に隠していた掌<sup>てのひら</sup>を、兄弟に向つて差し出す。

「はい。晴坊ちやま、幸坊ちやま」

ごつごつした掌に載つていたのは、二つの柏餅<sup>かしわもち</sup>だ。よく見ると、真っ白な餅が小さく裂けて中から餌が顔を覗かせている。茂市が、悪戯<sup>いたずら</sup>な顔で声を潜めた。

「親方と御新造さんにやあ、内緒でござえやすよ」

兄弟は、揃つて幾度も領いた。

ほんのり温かさの残る柏餅と、茂市と内緒の約束。隣には幸次郎がいて、『百瀬屋』の菓子の匂いが辺りに漂つていて。

晴太郎は嬉しくなつて、不格好だけれど飛び切り美味しい柏餅を頬張つた。

\*

あれは多分、蒸しに斑があつたんだ。

晴太郎は、目を覚ましてすぐに考えた。

裂けた辺りは餅が少し硬くなつていたし、中の餡の風味も損なわれていたはずだ。それでも、今の自分がつくる柏餅より美味しかつた気がする。

「まだまだお父つつあんには、敵わないな」

声に出してから、晴太郎は寝床から勢いをつけて起き上がつた。まだ、夢の中で嗅いだ小豆餡の匂いがしているような気がする。

懐かしい想い出に浸りかけ、晴太郎は頭を振つた。今だつて幸せには違ひない。思う通りの菓子が作れるなら、それで十分だ。心の内側にできた小さなさくれを無理に撫でつけて、晴太郎は身支度に取り掛かつた。

「ねえ、幸次郎。柏餅、やりたいんだけど」

土間と板の間併せて四畳半ほどの、ちんまりした勝手には、味噌汁の良い匂いが漂つている。こここの家主でもある菓種問屋、『伊勢屋』の主が、朝だけ手配りしてくれるものだ。「小豆餡の匂い」が、現の朝飯にとつて代わるにつれ、甘くほろ苦い夢の名残りも、胸の隅から消えてゆく。けれど、①楽しい思いつきはすつきり目が覚めた後でも、晴太郎の心を弾ませていた。

自分の椀に味噌汁をよそいながら、幸次郎は晴太郎を見ずに応じた。  
「勿論やりますよ。去年も一昨年も、進物用によく出ましたからね」

「そうじやなくてさ」

晴太郎も慌ただしく味噌汁をよそい、幸次郎を追う。指に跳ねた汁が熱かつた。

飯に洗濯、繕いもの、自分の世話は自分でする。神田は相生町の片隅に店を構える小さな菓子屋、『藍千堂』の決まりごとだ。

今度は兄弟並んで、炊き立ての飯を茶碗に山盛りにしながら幸次郎に告げた。

「上物じやなくて、ひとつ四文の柏餅」

幸次郎の手が動きを止めた。すぐに淡々と飯の盛りを整える。怒ったな、と晴太郎は察したが、一度付いてしまった勢いは止められない。

「ねえ、今年はそうしようよ」

飯の山盛りを大雑把に作りながら、『藍千堂』の商いを仕切る弟に頼み込む。味噌汁の鍋の前に立った茂市姿が、眼の端に入つた。ちらりと眼で合図を送つたが、助け船を出してくれるつもりはないようだ。弱気になりかけた分、余計に細かく言葉を重ねる。

「三盆白じやなくて、黒砂糖で餡を炊いて、味噌餡もつくろうよ。少し小振りにしてもいいし、そうだ、粉はうちで米から挽いちゃあどうだろうか。勿論俺が」

「兄さん」

ぴしやりと遮られ、晴太郎は口を噤んだ。朝飯の仕度が整つたところだ。晴太郎の斜め向かいで、茂市が笑いを堪えている。「どうすれば柏餅を四文でつくれるかくらいは、私にだつて分かります」

きりきりした物言いは、やはり「うん」と言つてくれるつもりはないらしい。

幸次郎は堂々とした押し出しに男前、加えて客あしらいも丁寧で達者だ。いつまでも幼さが消えない顔立ちの晴太郎と並んでいると、誰もが幸次郎を兄だと思う。見てくれや立ち居振る舞いだけではない。菓子作りの他はまるで不器用、商才はからつきの晴太郎に代わって、商いを切り盛りしてくれているのは幸次郎だ。しつかり者の幸次郎がいなければ、茂市も職人気質のかたぎだから、少々訳ありの『藍千堂』は忽ち立ち行かなくなるだろう。

「駄目、かな」

淡々と箸を進める幸次郎に、恐る恐るお伺いを立ててみる。

『藍千堂』は、上菓子屋なんですよ。四文菓子なぞ扱つたら、いい笑いものです。第一、日頃ご贅員にしてくださるお客様には、どうお詫びするおつもりですか。きっと、端午の節句の御使い物も『藍千堂』でとお考えでしょう。去年、一昨年、うちの柏餅が先様に喜ばれたから今年も、と思つてくださるお客様もおいでかもしれない

「一々尤もである。「四文菓子」は、素朴な味わいと安価が売りだ。同じ柏餅でも、進物用とはものがまるで違つてくる。『藍千堂』は京の下りものにも負けないと評判を頂く上菓子——茶席で出されるような、職人の腕と工夫を凝らした、見た目も味も贊沢な菓子を扱う菓子司だ。上菓子屋が四文菓子を扱うなど、聞いたことがない。それでも。

茂市が口を挟んだ。

「子供達の喜ぶ顔が、見たいんだよ。子供だけじやない。大人も、金持ちだつて、貧乏してたつて、『甘いもんでもおひとつ』つて言葉には、みんないい顔をするじやないか」

幸次郎の纏う気配が冷たくなつた。本氣で腹を立てている。晴太郎は首を竦めた。何か言おうとした幸次郎の機先を制して、茂市が口を挟んだ。

「両方やりやあ、いいんじやねえんですかい」

驚いたように、幸次郎が茂市の穏やかな顔を見返した。

「進物用の柏餅は、少しも手を抜かねえでつくる。その上で四文もやりてえ、やれるつてえ晴坊ちやまが仰るなら、やつて損はねえでしよう。笑いものになるかどうかは、幸坊ちやまの商いの腕次第だ」

むづきをしている頃から兄弟を知っている茂市は、さすが幸次郎の性分を心得ている。負けず嫌いの弟が「腕次第」と言われて引き下がるはずがない。

幸次郎は茂市を恨めしげに見つめていたが、すぐに俯いて、朝飯に戻った。心なしか箸の動きが乱暴だ。

「兄さんがやれると仰るなら、止めません。巧い売り方を工夫するのは私の仕事ですから、お任せください」

晴太郎は、こつそり溜息を吐いた。四文の柏餅をやれるのが嬉しいのではない。幸次郎の本気の怒りが消えたことにほつとしたのだ。

「ありがとう、幸次郎」

「帳尻合わせもしつかりお願いしますよ、兄さん。四文の損を進物の利鞘で埋めるのは、御免ですかね」「わかってる」

うきうきと答えた晴太郎を、幸次郎はひと睨みしてから、食べ終えた器を持って立ち上がつた。

店先で客の相手をしていた幸次郎が作業場へ顔を出した。茂市が昼飯に外へ出たのを見計らつてのことだ。『藍千堂』の作業場は板敷きの八畳間で、小ぢんまり、と言えば聞こえがいいが、茂市と晴太郎が仕事をするので一杯一杯だ。十人を下らない職人達が、互いに邪魔にならずに立ち働けていた、父の『百瀬屋』とは何もかもが違っている。ただ、隅々まで掃除の行き届いた様子、大切に使い込んだ道具、何より壁や天井に染みついた甘い匂いは、よく似ていた。

「どういうつもりですか」

幸次郎にこんな風に訊かれるたび、晴太郎は途方に暮れる。つむりも何も、「自分の思うような菓子を作りたい。自分の菓子を食べた人に、いい顔をしてもらいたい」、それだけだ。晴太郎の顔色を読んだか、幸次郎は肩を落とし、視線を晴太郎から逸らした。苛立つているようだ。

「兄さんの気持ちは、私だって分かっています。でも、今はそんな悠長は言つていられない」  
②

「うん」

「せめてもう少しご贋貲さんがついて、商いが楽に回るようになるまで、どうして辛抱して下さらないんです」

「ごめん」

言葉を重ねることに、幸次郎の苛立ちは募っていく。

『藍千堂』を潰す訳にはいかないんです。三年前の冬、実家を追い出され路頭に迷うところだった私達を迎え入れ、小さいとはいえ自分のものだった店をあつさり譲ってくれた茂市つつあんの為にも、負ける訳にはいかないんだ

大八車の前に飛び出した通りすがりの子供を庇つて死んだ父と、父の後を追うように身体を壊して逝った母。『百瀬屋』を引き継いだのは、職人頭だった叔父だ。晴太郎が、「砂糖の問屋から勝手に袖の下を受け取つた」と言い掛けられ、その叔父の手で『百瀬屋』を身一つで追われたのが、父の死からちょうど一年経つた日だつた。後を追つてきた幸次郎と共に茂市を頼つた時、晴太郎は茂市を「親方」と呼ぶつもりでいた。幸次郎は下働きをすると腹を括つていた。そんな自分達兄弟に、茂市は迷いなく店を譲つてくれ、自分は一介の職人に戻つた。茂市からは一通りではない恩を受けているのだ。幸次郎の言うことは正しい。

それでも晴太郎は、そうだね、とは言えない。勝つとか負けるとか、菓子づくりはそういうことじやない。人をいい顔にさせ

るはずの菓子が、そんなものを纏つちやいけない。

けれど今の幸次郎を支えているのは、正にその「負けない」の一念だ。

晴太郎は、黙るしかなかつた。

「一体なんだつて『四文』の柏餅なぞ、思いついたんです」

独白めいた問いには、哀しい色が滲んでゐる。答えない晴太郎に、声と揃いの眼を向けて、幸次郎は立ち上がつた。

『杵屋』さんの詫え菓子、急いでお願ひしますよ、兄さん。八つ前にお届けするお約束をしていますから』

「分かつてる」

商いの顔に戻つて頷き、幸次郎は店へ戻つていつた。

溜息が、ひとりでに零れた。がつくりと項垂れてぼやく。

「やつぱり、言えないよなあ」

もうひとつ、ふう、と大きく息を吐いてから、晴太郎は『杵屋』に頼まれた詫え菓子の仕上げに取り掛かつた。

## 【中略】

叔父の『百瀬屋』から柏の葉の仕入れができなくなるように妨害工作を受けるものの、晴太郎は八王子の市に行つて桑吉から柏の葉を直接仕入れることに成功し、かねてから自分が考えていた通りに、四文柏餅と進物用柏餅の二種類の柏餅を作つて売り出した。

その日から売り出した柏餅は、早速大評判となつた。

店先の隅に小さな屋台を設え、そこで四文の柏餅を扱う。売り子には『伊勢屋』から若い女中が手伝いに来てくれた。ちょっと見には別の店のように見え、四文の客は気兼ねせず、例年通りの柏餅を求めにくる客は、物珍しそうに横目では見るものの、氣分を害した様子もなく、それぞれの買い物を済ませて帰つた。

『藍千堂』の盛況ぶりを耳にしたか、早々に『百瀬屋』が動いたらしい。柏餅を売り出した翌日、怒鳴り込んできた客がいた。前の日、ふらりと寄つた『藍千堂』で進物用の柏餅を買い、吉原へ繰り出したという大店の跡取りだ。

四文菓子を箱詰めして、進物用と偽つて売つているというのは本当か。馴染みの見世では通つてゐるのに、いい笑い者

だ。

大変な剣幕の客を穢やかに宥めたのは、幸次郎だった。小豆餡の四文と進物用を、客の見ている前で店先から取り上げて差し出す。

「どうぞ、お味を比べて下さいまし。四文には四文、上菓子には上菓子の良さがございます。どちらがどちらでも、入れ替えて誤魔化すことなど無理な話でござりますよ」

疑いの顔で一口ずつ頬張った客の顔が、青くなつた。

元々四文の柏餅は一回り小振りに作つてあるから、見た眼で違いはすぐに分かる。食べれば更にはつきり差が分かるはずだ。三盆白と黒砂糖の違いが一番大きいが、四文の方は、小豆と餅用の米の質を一段ずつ落としている。小豆餡は、進物用は手間暇かけた上品な漉餡、四文は小豆の風味を生かした漬し餡。もうひとつ、四文に使う米粉は店で挽いているから、進物用に比べてほんの少し舌触りが荒いが、かえつて素朴な餡と釣り合いが取れている。

「吉原で通人で通つておいでの方なら、勿論違いがお分かりでございましょう」

やんわりと念を押した幸次郎に、固い顔つきで跡取りは応じた。

「あ、ああ。昨夜花魁や新造達と食べたのは、こっちの進物用と同じだった。邪魔をしたね、私もこれで安心したよ」

居合わせた客達の忍び笑いから逃げるよう、男は帰つていつた。それからの幸次郎の動きは素早かつた。進物用の柏餅を買った客には「食べ比べ用にどうぞ」と、進物用と四文、ひとつずつ添えて渡した。食べ比べれば確かに違うが、四文も旨いと、瞬く間に評判になつた。神田界隈では、「『藍千堂』の柏餅の食べ比べ」がちょっとした流行になり、進物用と同じ数だけ四文も箱詰めにしてくれと言い出す客もいた。

『百瀬屋』を出し抜くことに楽しみを見出した様子の幸次郎を余所に、晴太郎と茂市は目の回るような忙しさを味わつた。足りなくなつたら大変だと糸吉が言い張つたので、札を兼ねて多めに買い入れた柏の葉も綺麗に使い切つた。

節句当日、柏餅を扱う仕舞いの日は午過ぎには早々に全て売り切り、店じまいをしてから三人揃つて近くの『亀乃湯』へ足を運んだ。

半端な刻限の湯屋は空いていて、八つの休みに汗を流しに来ていたらしい大工二人が、流し場の水を貯めた水舟の前で、人使いの荒い親方の悪口に花を咲かせている。晴太郎はざつと汗を流してから、早々に石榴口へ向かつた。切妻破風の派手な石榴

口には、瀬戸で作った龜が付けられていて、潜るたびに頬が綻んだ。先客のいない浴槽に浸かる。ここ数日で溜めこんだ疲れが湯に溶けだしていくような心地に、晴太郎は浸つた。すぐに追いかけてきた幸次郎に、思い立つて訊いてみる。

「幸次郎、『食べ比べ』なんて、よくその場で思いついたね」

「それが私の仕事ですから」

得意げに返してから、幸次郎はぶつきらぼうに白状した。

「柏餅を売り始めた夜、<sup>(注3)</sup>お糸がこつそり文で報せてくれたんです。叔母さんが噂を流してるってね」

「そう、お糸が」

「お陰で、迎え討つ方策を一晩かけてじっくり練ることができました」

「それにしたって、大したもんだ」

③幸次郎の機転と商才は、並ではない。『藍千堂』には勿体ない。胸を過った鈍い痛みを、湯気に霞む流し場の茂市の中が、しん化した。

大工達は先に上がったのか、賑やかな声は少し前から止んでいる。石榴口の向こう、湯気に霞む流し場の茂市の中が、しんみりと笑っているように見えた。

「助けてもらつたのに、不機嫌だなあ」

晴太郎がからかうと、幸次郎は更に渋い声で続けた。

「岡の旦那にも、どうやら助けて頂いたようです」

「へえ、どんな」

食べ比べの噂を広めてくだすつたとか。幾人もの御客さんから、『八丁堀の旦那方の間で大層評判らしいね』と、伺いました。全く、敵なのか味方なのか、まるで分からぬお人だ

「じやあ、二人には礼をしないといけないな」

幸次郎の返事はない。

「ねえ、幸次郎」

「分かってますつて」

意固地な返事が子供のようで、晴太郎は先だつての夢を想い出してほろ苦い気分になつた。

翌日、『藍千堂』には普段の静けさが戻つていた。晴太郎と茂市は、眺え物の上菓子をじっくり作り、幸次郎は時折訪おとずれる通りがかりの客の相手を務める。昼過ぎ、出来たての上菓子の試作を店先に持つていった折、<sup>④</sup>幸次郎が兄を見ずに、飛び切り不機嫌に告げた。

「兄さんが四文柏餅を作りたいと言つた訳、食べてみて分かつた気がします」

晴太郎が黙つていると、弟は遠い目をした。

「子供の頃隠れて食べたおとつあんの柏餅の懐かしい味がしました」

襟えりから覗く照れ屋の弟の首が淡い朱あわに染まつていてる。

そうだね、と晴太郎は小さく応じた。

(田牧大和『甘いもんでもおひとつ 藍千堂菓子嘶おとず』)

(注1) 勝手……台所

(注2) 文……江戸時代のお金の最小単位。

(注3) お糸……『百瀬屋』のあととり娘むすめ。いとこの晴太郎と幸次郎兄弟を陰ながら応援おうえんしている。時折、両親に内緒で『藍千堂』を訪れる。

問一　——線部①「楽しい思いつき」とは、どのようなものですか。目的もふくめて説明しなさい。

問二　——線部②「今はそんな悠長は言つていられない」とありますが、それはなぜですか、説明しなさい。

問三　——線部③「幸次郎の機転と商才」とありますが、この場面ではどのようなことが「機転と商才」にあたりますか、説明しなさい。

問四　——線部④「幸次郎が兄を見ずに、飛び切り不機嫌に告げた」とありますが、なぜ「飛び切り不機嫌に告げた」のですか。その理由を説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

昔、私が知人に自分の料理を食べてもらったときのことです。「味はどう?」と聞いたら、「微妙」という答えが返ってきました。私はそれを「いまいち良くない」という意味に受け取り、あんまり美味しくなかつたのかと思ってがつかりしました。しかし、後からよく話を聞いてみると、その人は「良い味だ」という意味で「微妙」と言つたということが分かりました。

辞書を引いてみると、「微妙」には「いまいち良くない」という語義の他に、「一言では言い表せない趣があること」という語義もありました。私はこの語義を知らなかつたので、「微妙」を否定的な意味だと解釈してしまつたのです。

注意すべき表現の筆頭は、先ほどの「微妙」のように、良い意味と悪い意味の両方を持つ言葉でしょう。こういう言葉の中には、もともと悪い意味ではなかつたのに、さまざまな事情で否定的な意味が付いてしまつた言葉も少なくないようです。

たとえば「忖度」という言葉は、もともとは「相手の真意を推し量ること」でしたが、二〇一〇年代の政治問題の報道とともにこの言葉が広まつた結果、「目上の人間の意向を推測して、その人に都合の良いように取り計らう」という意味で使われるようになりました。悪いイメージが付いてしまつた「忖度」という言葉の気持ちを忖度すると、ちょっと気の毒に思えます。時間が経つにつれて否定的な意味が出てくるという現象は、「議論が煮詰まる」という表現にも見られます。この表現の解釈には世代差があり、比較的年齢が高い層はこれを「議論が十分になされて、結論が出る」という良い意味に捉えていますが、年齢が低い層では「議論が行き詰まる」という悪い意味に捉える人が多いそうです。会議の終わり頃に「そろそろ議論も煮詰まつてきましたので……」と言つたら、相手によつて受け取り方が変わるかもしれません。

逆に、もともとあまり良い意味ではなかつたのに、肯定的な意味でも使われるようになつた言葉もあります。たとえば「こだわり」は、もとは「ささいなことを必要以上に気にすること」でしたが、今では「こだわりの逸品」とか「絶対食べたい! こだわりスイーツ」のように、「良さをとことん追求すること」の意味でも広く使われています。「やばい」も、以前は「危険だ」とか「非常に都合が悪い」という意味で使わっていましたが、「すごく良い」という用法が広がっています。若い人たちが何か

につけて「やばい」を連発することをやばいと感じている人も少なくないようですが、あれほど頻繁に使われる背景には、程度の甚だしさをカジュアルに表現できる便利さがあるようと思えます。

ある言葉にどのようなイメージを持つかについては、どうしても世代差や個人差が出てきます。万人が、「この言葉には良い意味もあるけど、悪い意味もある」ということを認識しているわけではありません。自分と他人の「頭の中の辞書」がまったく同じではないということを意識しておきたいものです。

（川添愛『世にもあいまいなことばの秘密』）

問一 線部「自分と他人の『頭の中の辞書』がまったく同じではないということを意識しておきたいものです」とあります

が、それはなぜですか。本文に挙げられている具体例を一つ取り上げて説明しなさい。

問二 「鳥肌が立つ」という言葉にも、複数の意味があります。二通りの意味と、それぞれの意味にふさわしい、「鳥肌が立つ（立つた）」を用いた例文を考えて答えなさい。

三

各文の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

(1) 薬のコウノウを調べる。

(2) 会社をサイケンする。

(3) ライトをテントウする。

(4) 団体をトウソツする。

(5) メイキヨウシスイの心境。

第一回入学試験 解答用紙  
【国語】

第一回入学試験 解答用紙 【国語】

二〇一五年度

問三	問二	問一	問四	問三	問二	問一
(1)	例文2 意味2	例文1 意味1				
(2)						
(3)						
(4)						
(5)						
受験番号 _____						
氏名 _____						
得点 _____						
(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
このらんには 何も書かないこと						